

書く力向上セミナー作品集

『ペンの刺繍』

2025年10月1日号

～チャレジョブセンター熊谷～

「ずっと捨てられないもの」

「私はこの大量消費社会で生きているうちにだんだんなんでも捨てる捨て魔になった。

大切にしているのは何だろう。

春過ぎて、カーテンを開けクローゼットをひっくり返す。

ポリ袋を手は無心で作業してるのは服を買った時に心躍らせた私ではない。

夏がきて洗濯物の山ができる汗は半端ではない。服は消耗品なのか？

どんな大金をはたいた物でもどんなちゃちな物でも同じなのか？

それでも、自分で頑張って買ったワンピースが壊れたら嫌だなと思う日々。

自分の中にうずくまってる煩惱が目を覚ますのだ。

エゴが最後には残る。」

この話は私だけの話ではない。

エゴは地震のように爆発して君たちの社会全体を取り巻くのだろう。

震度は7を超えマグマがふつふつとしてきたとき、食べ物が世界を救う

互いの苦しみの向こうに何があるのか薄皮一枚、衣一枚でつながる喜びもあるから

貴方には揚げたときカラッとした慈愛を。

だから私はちょっと飴ちゃんを忍ばせる。

「ずっと捨てられないもの」

どれだけ時をさかのぼっても孤独のそばにはいつも愛があった。

瞳でも AI でもなく 50 音の序盤でもなくまぎれもない愛を私は捨てきれない。

遠い夢の中でいくつもの正解が存在するであろう実態のない感情は心を蝕

(むしば) んでいく。それでも私はいくら彼らを遠ざけても追いかけ、追い詰めてくる。

答えが 1 つに定まる学問として数学があるが私にとって数学は癒しそのものだ。

座標に向かっていけば解答が判別できるからだ、もはや数学も愛おしい。

気づけば数学にも愛を注いでいる私に劣等感を抱いている。ただこの愛だけは答えを持っている、だから必要十分条件であり一意に定まるのだ。私がどれだけ動き回っても、追いかける変数の背中を見続けて、希薄な心情を込めてただ答えがそこに存在すると思うとうれしくなる。他者への愛と数学の愛は全く異なるが求める答えは近似すると思うと私にはこれ以上の結論は言い表せない。

愛と数学の狭間に悲しい、解と鬱雑(うつざつ)の塊魂(かたまりだまし)。

「ずっと捨てられないもの」

私は 60 歳になった時、洋服や自宅のありとあらゆる自身のスペースを整理整頓することを始めた。私の気持ちに節目を感じ、時間を見つけながら身辺を綺麗にしようと思い立ったことがキッカケとなった。だが、どうしても捨てられないものがある。それは親友から貰った 1975～1976 度版のモーターショウの総合カタログである。

今でも何度も見てはあの頃のことを思い出している。貰った時の感動、モーターショウのことを語り合ったこと。何度となくカタログを見て印象が変わらないことがある。

トヨタはセンチュリーといった高級車から。日産はプレジデントといった高級車から。力を誇示するかのように構成されたカタログとなっている。私が注目したのは「本田技研工業」である。一種類の車「シビック CVCC」排気量 1500・1200 のみを出展していた。自動車に参入して 10 年。本田宗一郎 65 歳。1970 年、マスキー法の法律を受けて新参者のメーカーが挑戦し、完成させたエンジン。この時アメリカ BIG3 も法律に逆らえない不可能、法律の延期を訴えていた。

しかし、参入して僅か 10 年の新参者のメーカーが法律をクリアし、ホンダが現在に至るまでの礎を築いた軌跡が残っている。最新技術が常にアメリカから日本に流れていた流れを大きく変えた。宗一郎は作業服を着て工場に現れ、携わった全スタッフに頭を下げ、65 歳の社長が若者にステーキを焼いてふるまったという完成直後のエピソードは記憶から消えない。

「名前について思うこと」

名前の由来や込めた意味に、私は微塵も興味がわからない。私の名前は、「祖父と父の名前から一字ずつ貰ったのかな（実際、異なる一字が違うだけ）」としか思っていない。一応、漢字の意味からすると、こんなことを願ったのかなという連想はできる。親心としては、定番と言えるものであり、私自身も幼少期であれば目指す終着地として挙げていたかもしれない。しかし現状は、違う方向に突き進んでいるし、そんなところに行く気もない。

名前に使用する３つの漢字については、漢字を組合せることで名前通りの読み方をしても、漢字単体での読み方として名前通りの読み方で紹介されるのを、見聞きしたことがない。しかし、読み方自体は、時代劇の主人公や観光名所などの名前に出てくるくらいなので昔からあったのだろう。まあ、調べたら名字の由来についてはいくつか出てきたが、題目から外れてしまうのでここでは割愛する。

私の名前についての利点を挙げるなら、簡単に書きやすいことにある。例えば、「さいとう」を漢字で書こうとすると、「さい」はどの漢字で書くのか迷ってしまう。似た系統で、日常生活で登場しない漢字は、知っている人には簡単でも、知らない人には手も足も出ない。いまだに使う印鑑・ハンコも手軽に入手できない（番組の企画になるほど）し、呼び出しなどでもフリガナなしでは漢字の構造で照会されるのではないだろうか。

「スマホとの付き合い方」

「もしもし？カメよカメさんよ」な～んて、おいらは周りに流された操り人形にはならない。

君たちは画面の中のスマートを求めるがいつもスマートでいなくたっていいじゃないか。

なんとしてでもスマートでいようとする君たちに地を這う素晴らしさを君たちに教えてあげたい。

どっしり構えてずんずん進んでいけばよいのだよ。

スマートなカメ？そりゃ、おいらのことじゃないかい？

薄っぺら！そんなわけない！失敬しちゃうぜ！

ガラス張り？甲羅張りだぜ？柄すばらしい？

お前さんたち若いもんにはわからないかも知らねえが、それぞれにはそれぞれの良さがある。てくてこ歩むもよし、飛び跳ね歩むもよし、ゆっくり俺のように歩むもよし。

ただ、周り見て流されててるんじゃないだめだぞ。足を止め周り見て、楽しめ！どっしりと構えたアナログな人生も悪くないぞ。

君たちのあこがれている世界はツクリモノだ。ただ、みんな誠意をもって作られたつくりものだ。君たちのあこがれているインフルエンサーもアイドルもすばらしい。ただ、のめりこみすぎるな。自分の足取りを忘れるな。バーチャルな世界に引寄せられる気持もわかるが、リアルな世界で生きていることを忘れるな。